『倫理学原理』における蔡元培の翻訳の特徴
―毛沢東の批注への影響を考察しながら―

金　井　睦

Abstract

The main theme of this paper is to analyze the thought of young Mao Tsu-Tung. When he was young, he was greatly inspired by “System der Ethik”, written by Friedrich Paulsen, a German philosopher and educator.

It was translated into Japanese by Yoshimaru Kanie in 1900. Cai Yuanpei translated the Japanese version into Chinese. Mao read the Chinese translation and annotated it applying its Western ideas to traditional Chinese thought. He wrote a lot of annotations on the edges of the Chinese translation. But his annotations have not been clarified until now.

Therefore, to illuminate its influence on Mao’s thought, it is necessary to read not only the Chinese translation but also the original German text. However, in this paper, his annotations are mainly focused on the Chinese translation and their effects.

キーワード……毛沢東　Friedrich Paulsen　蔡元培　『倫理学原理』

1　はじめに

本稿では『倫理学原理』を翻訳した蔡元培を取り上げながら、その翻訳の特徴を論じてゆくことを目的とする。この研究は『倫理学原理』に記された毛沢東による批注を分析し、その思想形成を明らかにすることにつながるものである。『倫理学原理』の批注は毛が青年期に記したものである。毛の思想を研究してゆくにあたって、『倫理学原理』が原文のドイツ語から如何に翻訳されたのかを検討する必要があり、本稿ではこれを論じてゆく。

『倫理学原理』の原文を著した哲学者・教育学者であるフリードリッヒ・パウルゼン(Friedrich Paulsen 1846-1908)である。原著の *System der Ethik* [1] は、1896 年に出版され、その後 1899 年にフランク・ティリー（Frank Thilly）によって英語に翻訳された。さらに 1900 年には蟹江義丸によって『倫理学』が、そして 1909 年には蔡元培が漢語に翻訳した『倫理学原理』が公表された。

パウルゼンは 1846 年にランゲンホルン（Langenhorn）で農家の子として生まれ、1871 年にはベルリン大学で、博士号を取得した。75 年夏にはカントの認識論の発展史に関する著書によって、大学教授資格を取得した。これはパウルゼンが 29 歳の時である。1894 年にはベルリン

で、哲学及び教育学の正教授に任命された。その後の数年間で、パウルゼンはベルリンにおいて、最も影響力のある教授の一人となった。パウルゼンの著書は英語をはじめとする多くの言語に翻訳されることとなった [2)]。

日本語版の翻訳者である蟹江義丸（明治 5 年<1872>-明治 37 年<1904>）は、東京大学哲学科を出て、早稲田専門学校・浄土宗高等学院の講師、東京高等学校師範倫理学教授などを経て、明治 36（1903）年に文学博士となった [3)]。

System der Ethik の日本語版は、明治 33（1900）年に『帝國百科全書第二十四編　倫理学』として出版され、その後、明治 37（1904）年には蟹江義丸、藤井健冶郎、深作安文の共同翻訳で『倫理学体系』という名で、『倫理学』改訂版として出版された。その際、「厭世主義」という章を省略している [4)]。『倫理学体系』は第五版を翻訳したもので、アメリカのミズーリ大学教授であるフランク・ティリーの英語の翻訳と同じ部分を日本語に翻訳したものである。英語版では、ドイツ語から翻訳される際にアメリカ人にとっては重要でないというティリーの判断と、紙幅の制約から、いくつかの章が割愛された [5)]。

漢語の『倫理学原理』[6)] は、翻訳者の蔡元培がドイツ留学中に翻訳したものである。蔡元培がドイツに留学していたのは、1907 年から 1911 年の辛亥革命までの 4 年間であり、既に 40 歳を越していた時であった [7)]。蔡は翻訳時には蟹江の日本語訳を参考にしたとされており、実際に蔡は 32 歳の時から日本語を勉強していた [8)]。『倫理学原理』は 1909 年出版され、1921 年に至るまでに第六版が出版された。

蔡の『倫理学原理』が出版後、中国国内のいくつかの学校で、倫理学の教科書として採用され、1921 年末までに第 6 版が出版された [9)]。漢語の『倫理学原理』は、1917 年下半期から 1918 年上半期にかけて湖南省第一師範学校で楊昌済（1871－1920）によって講義された。この講義には当時 23 歳の毛沢東も出席しており、彼が『倫理学原理』を読んだとき、余白部分に、多くの意見や注釈などを書き記した。これを研究することにより、青年時代の毛沢東がどのような事に関心を示し、影響を受けたかを知ることができる。

本稿では、『倫理学原理』の要となっている「序論」を取り上げ、ドイツ語原文、蔡訳、蔡が参照したことが明らかである蟹江訳を比較しながら、翻訳の特徴を論じてゆく。ここでは、毛沢東が批注を記した箇所を中心に取り上げて精読してゆく。

2　序論第二節の翻訳をめぐって

『倫理学原理』の序論は各節に区分されている。漢語に翻訳された節はそれぞれ、第一節、第二節、第四節、第五節、第六節、第七節、第八節である。

毛沢東の批注は、序論の「（二）科学统系中伦理学之位置」より始まる第二節より記されている。この節は、『倫理学原理』を読み進める上で核となる箇所である。彼が最初に注目した点は、

倫理学が如何なる学問かということである。

以下、蔡訳の特徴を見るために、蔡訳、蟹江訳、ドイツ語原文を引用してゆく。

以下が蔡訳の本文である。「科学有二别：一主理论者，二主实践者。前者谓之学，后者谓之术；前者属于知识而已，后者又示人利用其能力以举措事物，而适合于人生之正鹄者也」[10)]（科学には二種類ある：一つは主に理論、二つは主に実践である。前者はいわゆる学、後者はいわゆる術である。前者は知識に属し、後者は人が如何にその能力を以て事物を取扱い、人生の目的に適合させるのかを示すものである。）

蟹江訳では以下に該当する。

「一般に科學的學課に二種の區別あり。學理的學課及び實践的學課即ち純粹なる科學と其應用たる技術と是なり。前者は認識を以て其目的とし、後者は人生の目的に適合せしめんが爲めに人間の能力によりて如何に事物を形成すべきかを敎ゆ」[11)]

これは原文では以下に該当する。

„Man kann überhaupt zwei Arten von wissenschaftlichen Disziplinen unterscheiden: theoretische und praktische, Theorien und Technologien, eigentliche Wissenschaften und Kunstlehren. Jene haben ihr Ziel in der Erkenntnis, diese in der Gestaltung der Dinge durch menschliche Tätigkeit, sie zeigen, wie die Dinge angemessen zu unseren Zwecken zu gestalten sind.“ [12)]

„Man kann überhaupt zwei Arten von wissenschaftlichen Disziplinen unterscheiden“に該当するのは、蟹江訳で「一般に科學的學課に二種の區別あり」、蔡訳で「科学有二别」である。蟹江は、„wissenschaftliche Disziplinen“を「科學的學課」と翻訳し、蔡も「科学」という語を使用していることから、蟹江の特徴を引き継いでいるといえる。

科学という言葉は、明治初期に日本で誕生したとされている。この言葉は、それぞれの専門領域、学域ごとに深化させることを意識したものである。そしてその領域ごとに実験を前提として実証的事実を究明することが「科学」なのである。科学の「科」は、分化された学問領域を表す言葉であり、「学」は西洋の意味では真理の探究をいう[13)]。

『蔡元培先生全集』の「哲學大綱」では、宋時代以降に言道学、言理学の中に哲学的な意義を含むようになったとされ、「科学」という観念は、近代以降に西洋から輸入され、確定されたと記されている[14)]。また、中国における「科学」という語の使用は、光緒 22 年（1896 年）の梁啓超の「変法通議」であるという説がある[15)]。

『漢語大詞典』によると熟語としての「科学」は宋陈亮（1143－1194）が用いていることから、この時代には既に使用されていることがわかるが、ここでは「科挙の学」という意味である。同辞典によると、これを「自然、社会、思惟などを客観的で規則的な分化された知識体系」の意で用いているのは、毛沢東であり、「中国共産党全国代表会議上の演説」で用いられ、「人们必须通过对现象的分析和研究，才能了解到事物的本质，因此需要有科学」と述べたとされている[16)]。これは、近代以降に日本で用いられた「科学」と同じ意を表しているといえる。

続く、„theoretische und praktische“は„eigentliche Wissenschaften und Kunstlehren “並びに„Theorien und Technologien“を反復している。蟹江はこれを「學理的學課及び實践的學課即ち純粹なる科學と其應用たる技術」と表している。一方、蔡訳では「一主理论者，二主实践者。前者谓之学，后者谓之术（一に理論、二に実践。前者は学といい、後者は術という）」と説明され、「理論＝学」、「実践＝術」という語で表されている。

『漢語大詞典』では「学術」という熟語はみられるが、「学」と「術」というように、それぞれの語を独立させて意味づけているものは見当たらなかった。

「学」と「術」という語をそれぞれ対比させて説明しているのは、西周の『百学連環』の中にもみられるものであり、西はこれらを対比させることによって、科学を体系的に説明している。すなわち、蔡による翻訳も日本語の文献を参考とした可能性が高い。

原文で„Jene haben ihr Ziel in der Erkenntnis“に該当する部分は、蟹江訳では、「前者は認識を以て其目的とし」であり、蔡訳では「前者属于知识而已」である。蔡訳では„Ziel（目的）“という語は明確に翻訳されていない。並びに、„diese in der Gestaltung der Dinge durch menschliche Tätigkeit, sie zeigen, wie die Dinge angemessen zu unseren Zwecken zu gestalten sind“に該当する部分は「後者は人生の目的に適合せしめんが爲めに人間の能力によりて如何に事物を形成すべきかを教ゆ」、蔡訳で「后者又示人利用其能力以举措事物，而适合于人生之正鹄者也」である。毛は以上の一文には特に批注を記してはいないが、「科学」という熟語を、近代的な意味で理解していたであろうことは、後の毛の発言より明らかである。

倫理学については次のように表現されている。「伦理学之属于术，无疑矣。盖伦理学者，所以示人之生活必如何而后能适合于人生之正鹄者也」[17]（倫理学が術に属することは疑いようのないことである。およそ倫理学というのは、人の生活をいかに人生の目的に適合させるかを指示するものである。）

また、蟹江訳では以下に該当する。

「倫理學は實踐的學課に属すること明瞭なり。如何にすれば人間の生活其物が其目的若くは其規定に適合すべく形成され得べきかを指示するものなり」[18]

これは原文では以下に該当する。

„Nach der obigen Erklärung gehört die Ethik zu den praktischen Disziplinen;sie will zeigen, wie das menschliche Leben selbst angemessen zu seinen Zweck oder seiner Bestimmung gestaltet werden könne.“ [19]

原文と蟹江訳を比較すると、蟹江はほぼ忠実に原文から翻訳していることがわかる。しかし、蔡訳では、蟹江が「實踐的學課」と翻訳している„praktische Disziplinen“については「术（技術）」と翻訳しているなど、蔡による独自性がみられる。また、「所以示人之生活必如何而后能适合于人生之正鹄者也」についても、蔡の意訳が見られる。この文に関しても、蟹江の翻訳の方が原

文をより忠実に訳していることがわかる。ただし、文中の„Bestimmung“を蟹江は「規定」と翻訳しているが、これは「（人間の）使命」などと翻訳する方が妥当であるように思える。この部分に関しては、蔡は明確な翻訳をしていない。

ここでは、毛は「此言伦理学属于术」[20]（これは倫理学が術に属していることを言う。）と記している。これは、倫理学が術に属す学問であることを認識しているといえる。

以下は倫理学の位置づけについてである。「故伦理学者，位于诸术之上，而广言之，直可以包含堵术。何则？凡所谓术者，皆人所资以达其完全之生活者也，自商工业以至教育政治，何一不然」[21]（故に倫理学というのは、もろもろの術の上に位置するものであり、概していえば、もろもろの術を包含できるということである。何故か？およそ、術というものは、人が完全な生活に到達することに役立つものである。これは商工業から教育政治に至るまで、何一つ変わらない。）

「されは倫理學は一切の實踐的學課の頂上に位し一切の實踐的學課を包含す、如何となれは一切の技術は必竟人間の生活を圓滿に形成せんとするの一目的に資するものに他ならされはなり。造船、賣買の諸技より以て教育政治の諸術に至るまで皆比例に漏れず」[22]

„Sie steht durch diese ihre Aufgabe an der Spitze aller praktischen Disziplinen, sie alle auf gewisse Weise einschließend, denn alle Künste dienen zuletzt dem einen Zweck: das menschliche Leben vollkommen zu gestalten. Das gilt von der Kunst des Schiffbaues und Handels nicht minder, als von der Kunst der Erziehung und Staatsregierung.“[23]

蔡訳で「故伦理学者，位于诸术之上，而广言之，直可以包含诸术。」に該当する一文は、„Sie steht durch diese ihre Aufgabe an der Spitze aller praktischen Disziplinen“であり、蟹江訳で「されは倫理學は一切の實踐的學課の頂上に位し一切の實踐的學課を包含す」にあたる部分である。ここでも、„praktische Disziplinen“は、蟹江訳で「實踐的學課」と翻訳されているが、蔡訳では「术（技術）」と表現されている。すなわち、蔡は「倫理学はもろもろの技術の上に位置するものであり、技術を包含するものである」というのである。

また、ここでは、„praktische Disziplinen“の直前に、「すべての」を意味する„aller“とあることから、複数形で表現することが妥当である。蟹江訳では「一切の實踐的學課」、蔡訳では「诸术（もろもろの技術）」と表現していることより、両者とも複数形を用いている。

そして蟹江訳で「一切の技術は必竟人間の生活を圓滿に形成せんとするの一目的に資するものに他ならされはなり」、原文で„denn alle Künste dienen zuletzt dem einen Zweck: das menschliche Leben vollkommen zu gestalten.“に該当する箇所は、蔡訳で「凡所谓术者，皆人所资以达其完全之生活者也」である。„Künste“という語は、「技術」の複数形であり、ここではじめて原文でも「技術」という表現が使われている。ここでも、蟹江は忠実に翻訳している。

この文では、蔡訳でも「术（技術）」という単語が使われているが、蔡は„praktische

Disziplinen“と„Künste“を区別することなく、同様に「术（技術）」と翻訳している点で、蟹江のような正確さはないように見える。

またここでは、„alle Künste“という語がつかわれており、「すべての技術」と表現することが妥当である。蟹江は「一切の技術」というように、複数形を用いて忠実に翻訳しているが、蔡訳では前文に用いたような「诸术」という複数を表す表現ではなく、単なる「术」のみである。

また、蟹江訳で「造船、賣買の諸技より以て教育政治の諸術に至るまで皆比例に漏れず」、原文で „Das gilt von der Kunst des Schiffbaues und Handels nicht minder, als von der Kunst der Erziehung und Staatsregierung.“に該当する箇所は、蔡訳で「自商工业以至教育政治，何一不然」である。蟹江訳で造船、賣買と翻訳されている„Schiffbau und Handel“は蔡訳では「商工业（商工業）」と簡略化されている。

また、ここでも原文は„Kunst“という「技術」の単数形を使い、蟹江訳では「諸技」と表現しているが、この„Kunst“は„Schiffbau“と„Handel“という二つの語句にかかっていることから、蟹江の表現でも問題ない。この文では、原文、蟹江訳では文章が完結しているが、蔡訳では「,」によって文章が区切られている。そのため、蔡訳では、„Kunst“に該当する語句は見当たらないが、これは前文の„Kunst“を引き継いでいるためであると考えられる。

上述の文より、蔡訳では„praktische Disziplinen“と„Künste“を「術」という語で表記している点で、統一性のない翻訳となっていることがわかる。

「凡术皆以学为基。盖应用学理以解释其所实践之条目者也。而伦理学之所基，则为人类学及心理学，盖伦理学之鹄，在豫定人类性质及人生规则之知识，而用以解释人类全体及各人之生活及行为，如何则反益其障碍。此其关系，得以他术比例而明之。」[24]（およそ術は学に基づくものである。およそ、その実践の項目を解釈するために学理を応用するのである。そして倫理学の基礎は、人類学及び心理学である。概して倫理学の目的は、人類の性質及び人生の規則を予定（計画）し、それによって人類全体及び各人の性格及び行為を解釈し、如何にその障害が利益に反するかを解釈するものである。この関係は他の術と比較することによって、明らかにすることができる。）

「一切の實踐的學課は學理的學課を以て其基礎とす。彼等は實踐的問題を解釋せんが爲めに學理的認識を應用せるものに過ぎず。倫理學の基礎たる學理的科學は人間學及び心理學なり。倫理學は人間の性質及び其生活規定の認識を豫想して以て人性の發展は人類全躰及び個人の如何なる生活と行爲とによりて幇助せられ若くは障礙せらるるやの問題を解釋せんと試みるものなり。此關系は之を他の實踐的學課と比較するときは一層明瞭ならん。」[25]

„Alle praktischen Disziplinen beruhen auf theoretischen;sie sind nichts anderes als Anwendungen theoretischer Erkenntnisse zur Lösung praktischer Aufgaben. Die theoretische Wissenschaft, zu der die Ethik in diesem Verhältnis steht, ist die Wissenschaft vom Menschen, die Anthropologie und

Psychologie. Auf Grund einer vorausgesetzten Erkenntnis der Natur und der Lebensbedingungen des Menschen unternimmt die Ethik die Beantwortung der Frage:durch welche Lebensformen der Gesamtheit, durch welche Verhaltungsweisen des Einzelnen wird die Entfaltung der menschlichen Natur begünstigt oder gehemmnt?“ [26)]

蔡訳で「凡术皆以学为基」に該当する箇所は、蟹江訳で「一切の實踐的學課は學理的學課を以て其基礎とす」、原文で„Alle praktischen Disziplinen beruhen auf theoretischen“である。ここでも、蟹江訳では「實踐的學課」と翻訳されている、„praktische Disziplinen“は、蔡訳で「术（技術）」とされている。

また、蔡訳で「而伦理学之所基，则为人类学及心理学」に該当する箇所は、蟹江訳では、「倫理學の基礎たる學理的科學は人間學及び心理學なり」、原文では„Die theoretische Wissenschaft, zu der die Ethik in diesem Verhältnis steht, ist die Wissenschaft vom Menschen, die Anthropologie und Psychologie.“に該当する。この一文は、倫理学の基礎となる学問の説明である。„Die theoretische Wissenschaft“という語は、蟹江訳では「學理的學課」に相当するが、蔡訳ではこれに該当する語は見当たらない。

„Auf Grund einer vorausgesetzten Erkenntnis der Natur und der Lebensbedingungen des Menschen unternimmt die Ethik die Beantwortung der Frage“という箇所は「人間の性質と生存条件の前提となる認識を基礎として、倫理学は次の回答を試みる」と翻訳することができる。この文の„eine vorausgesetzte Erkenntnis“を蟹江は「認識を豫想して」と翻訳した。しかし、この場合の„voraussetzen“は「前提」とするのが妥当であり、「前提となる認識」と訳すことができる。蔡訳では「豫定人类性质及人生规则之知识」に該当し、「人类性质及人生规则之知识（人類の性質及び人生の規則の知識）」を「豫定（予定）」すると翻訳されている。また、「認識」や「理解」を意味する„Erkenntnis“を、蟹江は「認識」と翻訳しているが、蔡は「知识（知識）」という語を充てている。また、„Lebensbedingungen“という語は、二つの名詞„Leben（生存）“と„Bedingung（条件）“から成り立っており、「生の条件」という訳が妥当である。しかし、蟹江は「生活規定」という語を使い、抽象的な表現をしている。蔡訳でも蟹江訳と同様に「人生规则（人生の規則）」という語を使っている。蔡も蟹江と同様の表現を用いていることから、少なくともこの一文においては、蔡は蟹江の訳を参照しているということが明確である。

また、蔡訳で「盖伦理学之鹄」、すなわち「概して倫理学の目的は」という部分は、蟹江のように忠実な訳ではなく、「鹄（目的）」という語を付け足した上に、独自の簡略化がなされている。

„durch welche Lebensformen der Gesamtheit, durch welche Verhaltungsweisen des Einzelnen wird die Entfaltung der menschlichen Natur begünstigt oder gehemmt“という箇所は、倫理学が如何なる学問であるかを説明したものであり、蟹江訳では「人性の發展は人類全躰及び個人の如何なる生活と行爲とによりて幇助せられ若くは障礙せらるるや」に該当し、蔡訳では「而用以解释人

类全体及各人之生活及行为，如何则反益其障碍」に該当する。„Lebensformen der Gesamtheit“は、「社会全体の生活様式」、„Verhaltungsweisen des einzelnen“は「個人の行動の仕方」と翻訳でき、蟹江訳では「人類全躰及び個人の如何なる生活と行爲」に該当し、蔡訳では「人类全体及各人之生活及行为（人類全体及び各人の生活及び生の行為）」に該当する。「生活様式」という意味の語である„Lebensformen“は、蟹江、蔡訳ともに明確に翻訳されずに、ただ「人類全体」のみである。また「態度」、「行動様式」などの意を表す„Verhaltungsweisen“についても同様で、これを「生活と行為」と翻訳している点は、蟹江、蔡訳に共通している。これより、蔡が蟹江訳を参照していたということが推測でき、翻訳のもつ難しさが表れている。
ここでは、毛は「此言术与学之关系」[27]（これは術と学の関係のことをいう。）と記している。これは、毛はここで術と学の関係に注目しているためであるといえる。

3　序論の各節の概要について

以下では、前章で取り上げた節に続く、序論の各節の概要となる箇所を取り上げてゆく。

第四節では、倫理学の研究法について述べられている。

「（四）伦理学之研究法。吾人之知识，可别为二种：一曰得之于经验者，二曰得之于直觉者。直觉之知识，可以数学为模型。盖先立单元，而演绎之以为种种之公例，以论理证明之。据思想中之原理，而指示其必然之因果者也。经验之知识，则反是。若物理学，若化学，必先观察事物之状态，求得其自然相应之规律，而后敢揭以为普通之法式，因果律是也。」[28]（倫理学の研究法。人の知識は二種類に区分することができる。一は経験、二に直覚である。直覚の知識は数学を以てモデルとする。およそ単元の先に立ち、演繹のさまざまな定義や命題から公理を展開し、論理を証明することである。論理の必然に従って、その必然の因果を指示するものである。経験の知識はしかし、これとは逆である。もし物理学や化学であれば、必ず、まず、事物の状態を観察し、その自然相応の法則を求め、さらに一般的な方式を掲げるのである。これが因果律である。）

「倫理學研究の方法：四。通例認識を分ちて經驗的認識及び合理的認識となす。合理的認識の模型は數學にして定義及び單元より定理を發展し論理學的に之を論證す、換言すれば思惟上其原理の必然的結果たることを指示す。之に反して經驗的科學は物理學及び科學の如く觀察を基礎として事物の狀態の規律整然たることを表彰する普通の方式を攻究す。因果律即ち是なり。」[29]

„4.Die Methode der Ethik. Die Frage ist : Woher gewinnt sie ihre Erkenntnis? Wie beweist sie die Wahrheit ihrer Sätze? Es gibt zwei wesentlich verschiedene Formen der Erkenntnis: empirische und rationale Erkenntnis. Diese, deren Prototyp die Mathematik ist, entwickelt aus Definitionen und Axiomen Lehrsätze und demonstriert sie logisch, d,h. sie zeigt, daß sie mit den Prinzipien als

denknotwendige Konsequenzen gegeben sind. Empirische Wissenschaften dagegen, wie Physik und Chemie oder Psychologie, suchen auf Grund von Beobachtungen allgemeinste Formeln zu bilden, durch welche die Regelmäßigkeiten im Verhalten der Dinge ausgedrückt werden ; solche Formeln heißen Gesetze.“ [30)]

蟹江、蔡訳の節始めには小見出しがみられる。蟹江は「倫理學研究の方法」、蔡は「（四）伦理学之研究法」という小見出しである。原文では„Die Methode der Ethik（倫理学の方法）“に該当するものである。このような小見出しは、蟹江の『倫理学体系』では、欄外に表記されており、原文、蔡訳では節始めの文中に記されているものである。

原文の„Die Frage ist : Woher gewinnt sie ihre Erkenntnis? Wie beweist sie die Wahrheit ihrer Sätze? “は「問われるべきは、倫理学の認識はどこから得るのか？どのように倫理学の命題の真理を証明するのか」という一文であるが、これは蟹江、蔡共に翻訳していない。

蔡訳で「吾人之知识，可别为二种：一曰得之于经验者，二曰得之于直觉者」に該当する箇所は、日本語で「通例認識を分ちて經驗的認識及び合理的認識となす」、原文では„Es gibt zwei wesentlich verschiedene Formen der Erkenntnis: empirische und rationale Erkenntnis“である。これは、「主に二つの異なる認識の形態がある。経験的認識と合理的認識である」と訳すことができる。蟹江訳では「二つ」、「二種」を表す„zwei“などは明確に翻訳されていないが、蔡訳ではこれを「二种（二種）」としている。この二種類の認識とは„empirisch（経験）“と„rational（合理）“である。日本語では、これらの語句を「經驗的認識及び合理的認識」と的確に翻訳している。しかし、蔡訳では„rational “を「直觉（直覚）」と翻訳しており、「合理」という語は用いていない。

ここでは、毛は「此言吾人之知识有二种」[31)]（これは人の知識には二種類あることをいう）と記している。この二種類とは、経験と直覚の知識のことであり、毛は知識をこのように区分すると認識しているといえる。

続く一文の「直觉之知识，可以数学为模型。盖先立单元，而演绎之以为种种之公例，以论理证明之。据思想中之原理，而指示其必然之因果者也」は、蟹江訳で「合理的認識の模型は數學にして定義及び單元より定理を發展し論理學的に之を論證す、換言すれば思惟上其原理の必然的結果たることを指示す」、原文で„Diese, deren Prototyp die Mathematik ist, entwickelt aus Definitionen und Axiomen Lehrsätze und demonstriert sie logisch, d,h. sie zeigt, daß sie mit den Prinzipien als denknotwendige Konsequenzen gegeben sind“に該当する。文頭の„Diese“は„rational Formen der Erkenntnis “を意味するが、ここでも蔡は「直觉」と翻訳している。「合理的認識の典型は数学であり、これは定義や命題から„Lehrsätze“が展開し、論理的に実証することである」ことが述べられており、蟹江は「合理的認識の模型は數學にして定義及び單元より定理を發展し論理學的に之を論證す」とあるように、ほぼ的確に翻訳している。さらに蔡は、数学は「演绎（演繹）」という言葉を以て論理を証明するとした。

また「经验之知识，则反是。若物理学，若化学，必先观察事物之状态，求得其自然相应之规律，而后敢揭以为普通之法式，因果律是也」という一文は、経験的認識の説明であるが、これは蟹江訳では「之に反して經驗的科學は物理學及び化學の如く觀察を基礎として事物の狀態の規律整然たることを表彰する普通の方式を攻究す。因果律即ち是なり。」、原文では„Empirische Wissenschaften dagegen, wie Physik und Chemie oder Psychologie, suchen auf Grund von Beobachtungen allgemeinste Formeln zu bilden, durch welche die Regelmäßigkeiten im Verhalten der Dinge ausgedrückt werden; solche Formeln heißen Gesetze.“に該当する。„Empirische Wissenschaften dagegen, wie Physik und Chemie oder Psychologie“は「物理学や化学、或いは心理学といった経験的な学問は反対に」という一文であるが、蟹江・蔡訳では、「之に反して經驗的科學は物理學及び化學」、「经验之知识，则反是。若物理学，若化学」とあるように、共に„Psychologie（心理学）“に該当する語句が省略されている。そして„suchen auf Grund von Beobachtungen allgemeinste Formeln zu bilden, durch welche die Regelmäßigkeiten im Verhalten der Dinge ausgedrückt werden; solche Formeln heißen Gesetze“は「（経験的学問は）観察に基づいて、最も普遍的な公式を形式するよう求める。この公式によって、事物の振舞いにおける規則性が表現されるのである。このような公式が法則とよばれる。」という意の文であるが、蟹江、蔡は、ほぼ的確に翻訳している。また„Gesetze“という語を「因果律」と翻訳している点は蟹江、蔡訳共に共通している。

『漢語大詞典』によると、「因果」とは仏教用語であるとされている[32]。このような語を蔡が意図的に使ったとは考え難く、蟹江の訳を参考にしたと推測できる。

ここでは、毛は「演绎法归纳法」[33]（演繹法と帰納法）と記している。

以下は第五節の冒頭部分である。

「（五）道德律与自然律之比较。吾人见自然界各种现象，常循有定之规则而变化，于是立一通普之法式以表之，是为自然律。」[34]（道徳律と自然律の比較。人は自然界の各々の現象を見て、常に定められた規則や変化に従い、そして一通りの普遍的な方式を立て、これを表すことをもって自然律とする。）

「道德律及び自然律：五。余は此に道德律との關系に就きて一言せんとす。自然律は自然經過の常に一定の規則に率由して毫も異例を許さざるものなり。例へは物理學に於て引力律は宇宙間の一切の物質が數學的に精密に相互に一定不變の關係を有することを表彰するが如し。此意義に於て因果律其物は嚴密に普遍的の自然律たることを得」[35]

„5.Ich füge hier eine Bemerkung über das Verhältnis der Sittengesetze zu den Naturgesetzen ein. Naturgesetze sind Formeln, die eine konstante Gleichförmigkeit im Naturlauf ausdrücken. Im engeren Sinne setzt man den Begriff so, daß er eine absolute und ausnahmslose Gleichfömigkeit bezeichnet; so nimmt die Physik an, daß das Gesetz der Gravitation das beständige Verhalten aller Massenteile im Universum gegeneinander mit mathematischer Genauigkeit zum Ausdruck bringt. In diesem Sinne gilt

das Kausalgesetz selbst als streng allgemeines Naturgesetz. In diesem Sinne gilt das Kausalgesetz selbst als streng allgemeines Naturgesetz. “ [36)]

この節では、蟹江、蔡はそれぞれ「道徳律及び自然律」、「道德律与自然律之比较」という小見出しをつけた。これらは原文の冒頭の„Ich füge hier eine Bemerkung über das Verhältnis der Sittengesetze zu den Naturgesetzen ein“の一部であると考えられる。「道徳律及び自然律」という小見出しは„Sittengesetze“ と„Naturgesetze“より、「道德律与自然律之比较」は„das Verhältnis der Sittengesetze zu den Naturgesetzen“より引用されている。„das Verhältnis“は「関係性」を表す語であるが、蔡はこれを「比较（比較）」という語を用いて表現しているようである。この一文では、蟹江は「余は此に道徳律との關系に就きて一言せんとす」という文も用いてより的確に訳している。

該当の箇所は、蟹江は原文よりほとんど忠実に翻訳しているが、蔡訳では大幅に省略されている。例えば原文、蟹江訳では„Universum（宇宙）“の„Gravitation（引力）“の例を用いて、不変的な規則が存在することを説明しているが、蔡訳ではこれを「自然界各种现象（自然界の様々な現象）」として、宇宙の例は翻訳されていない。また„Kausalgesetz（因果律）“という語句は蔡訳ではされず、不変的な法則＝自然律というのみである。

この節では、蔡による独自の省略が見られることが大きな特徴である。また、„Kausalgesetz“の翻訳については、蟹江は「因果律」としたが、蔡はこれを明確に表現しなかった。前節では、蟹江・蔡共に、„Gesetze“を「因果律」と翻訳していることからもわかるように、蟹江、蔡共に„Kausalgesetz“という語に苦戦しているように見える。

ここでは、毛は「此言自然律有广狭二义」 [37)]（これは自然律には広義と狭義があることをいう）と記している。

「（六）具足之概念。前者，吾言道德之正鵠在至善，而至善即具足之生活。夫具足生活者何耶？盖谓人类之体魄及精神，其势力皆发展至高而无所歉然之谓也。」 [38)]（具足の概念。前者は、私が道德の目的は善にあると考えることであり、善に至るということは即ち、具足の生活であるということである。その具足の生活とは一体何であるか？およそ人類の身体と精神の力が交渉に至るまで発展し、そこに負の意味はないことをいう。）

「圓滿の概念：六。余は至善を決定すべき倫理學の職分に就きて再び一言せんとす。余は既に至善の圓滿なることを論述せり。個人の至善とする所は圓滿なる人間生活、即ち人間の一切の身躰的精神的勢力を充分に發展し活動せしめたる生活なり。」 [39)]

„6.Das höchste Gut für den Menschen wurde oben als ein vollkommenes Menschenleben bestimmt, ein Leben, im dem es zur vollen und harmonischen Entfaltung der Persönlichkeit und zur Betätigung aller ihrer Kräfte kommt.“ [40)]

この節では、蟹江、蔡はそれぞれ「具足之概念」、「圓滿の概念」という小見出しをつけた。

原文では、パウルゼンは上で既に、「人間にとっての最高の善は、完全な人間の生として規定されるものであり、人生において、人格の十全にして調和的な発展と、個のもつすべての力を活動させることができるような生を定義した」と述べられており、蟹江、蔡訳でも、ほとんど意味を取り違えている箇所はないが、やや表現に違いが見られる。例えば、蟹江、蔡訳ではそれぞれ「余」、「吾」という一人称があるが、原文にはそれは見られない。また、蔡は「夫具足生活者何耶？」と読み手に問い掛け、最高の善とは人間の身体、精神力を発達させるものであり、「歉然之谓」はないという語を付け加えた。

ここでは、毛は「只能以形式说明至善」[41]（ただ形式によって至善を説明できることをいう）と記している。

「（七）伦理学之普通形式。人类初无所谓普通之道德也，各民族所持以为普通之模范者，恒自有其特殊之道德。如英国人与亚洲人，各道其所道而德其所德，彼其生活之状态现已不同，而道德亦随之以不同，固不可诬之事实也。」[42]（倫理学の普通の形式。これはいわゆる人類元来の普遍的道徳のことではない。各民族が所持する普遍的模範のことをいい、常にそこには特殊な道徳が存在している。たとえば、英国人とアジア人のようなもので、各々の道がその独自の道であり、各々の徳がその独自の徳なのであり、彼らの生活状況というのは、あまりにも異なるものであり、道徳もまたこれに付随して異なり、もとより事実を偽るようなことではない。）

「如何なる意義にて倫理學は普遍妥當性を有するや：七。是に於て尚次の結果を生ぜん。元來具躰的なる普遍妥當的道徳あることなし。人間の普遍的模範の徽號は各自特殊の道徳を要す。英國人は支那人若くは亞非利加人と異り將た異るべきが如く人々各其特殊の道徳を有す。」[43]

„7.Hiermit ist eine weitere Folge gegeben: es kann eigentlich keine allgemein gültige Moral in concreto geben, die verschiedenen Ausprägungen des allgemeinen Typus des Menschen erfordern jede ihre besondere Moral. Wie ein Engländer ein anderer ist, als ein Chinese oder Neger, und auch ein anderer sein will und soll, so gilt für jeden unter ihnen auch ein andere Moral.“ [44]

この節では、蟹江、蔡はそれぞれ「如何なる意義にて倫理學は普遍妥當性を有するや」、「伦理学之普通形式」という小見出しをつけた。蔡訳は蟹江訳より簡略化されている。

原文の„Hiermit ist eine weitere Folge gegeben“は蟹江訳では「是に於て尚次の結果を生ぜん」に該当するが蔡訳では省略されている。また„es kann eigentlich keine allgemein gültige Moral in concreto geben“は各「元來具躰的なる普遍妥當的道徳あることなし」、「人类初无所谓普通之道德也」に該当する。この一文は蟹江、蔡共に忠実に翻訳している。

„die verschiedenen Ausprägungen des allgemeinen Typus des Menschen erfordern jede ihre besondere Moral“は各「各民族所持以为普通之模范者，恒自有其特殊之道德」、「人間の普遍的模範の徽號は各自特殊の道徳を要す」に該当する。蟹江訳は、原文に忠実に翻訳しているが、蔡訳では„Menschen（人間）“という語が、「民族」という語を用いて翻訳されている点が原文

と異なっている。

『漢語大詞典』では、「民族」という語は「泛指历史上形成的，处于不同社会发展阶段的各种人的共同体」並びに「特指历史上形成的有共同语言，共同地域，共同经济生活以及表现于共同文化上的共同心理素质的人的共同体」と定義されている [45]。前者の例は、原始民族、古代民族、現代民族、中華民族であり、後者の例は、少数民族、多民族国家であるとされている。

つまり、ここで蔡が「民族」という語を用いたのは、蔡の意図があったためであると考えられる。すなわち、「人間」という語が社会など、人が生活する場所全体を表しているのに対し、「民族」という語は、政治的・歴史的に形成された帰属意識を共有する集団を表しているといえる。これは、蔡が、当時から複数の民族が共存していた中国では、「民族」という語を以て説明する方が読み手が理解しやすいと判断したためであると考えられる。

「如英国人与亚洲人，各道其所道而德其所德，彼其生活之状态现已不同，而道德亦随之以不同，固不可诬之事实也」は、蟹江訳で「英國人は支那人若くは亞非利加人と異り將た異るべきが如く人々各其特殊の道德を有す」、原文で„Wie ein Engländer ein anderer ist, als ein Chinese oder Neger, und auch ein anderer sein will und soll, so gilt für jeden unter ihnen auch ein andere Moral“に該当する。

これは「イギリス人は、中国人や黒人と異なっているように、つまり異なることを理想とし、そしてそれが当然であるように、各種道德のもとで価値をなしている。」と訳すことができるが、„Chinese oder Neger（中国人や黒人）“が蟹江訳では「支那人若くは亞非利加人」というように、「黒人」が一般的な「アフリカ人」に変更されている。さらに蔡訳では「英国人与亚洲人（イギリス人とアジア人）」というように、黒人を省略した上に、「中国人」が一般的な「アジア人」と変更されている。

すなわち原文では、中国人並びに黒人とは違い、イギリス人は全く異なる道德観を持つことを強調しているのに対して、蔡訳ではイギリス人と中国人の対比ではなく、イギリス人とアジア人を対比させている点が大きく異なるのである。

また、蟹江は「黒人」を「アフリカ人」と翻訳し、これを地域に依って翻訳しているが、原文では人種で区別しているようにみえる。蔡は、このような見方を敏感に読み取った可能性があり、「イギリス人」と「アジア人」というように、中国人をその比較の対象としないような翻訳をしたと推測できた。

ここでは、毛は「以广义言之，人类无普通之道德」[46]（広義の言によると、人類には普通の道德はない）と記している。

「（八）伦理学之所以为实践科学。问者曰，伦理学者，将不惟以其处置实践之方法，而又大有影响于实践之方面，故号为实践科学耶？曰然。伦理原始之本义，固如是。雅里士多德勒曰，伦理学之正鹄，在实践，而非在讲求也。」[47]（倫理学が実践科学である所以。ある人は、倫理学

はただ、実践的な方法のみを扱うのではなく、実践の方面にも大きな影響を及ぼすために、実践的科学というのか？曰く、然り。倫理学の元来の本義は、之である。アリストテレスは、倫理学の目的は実践中にあり、探究だけではないと言っている。）

「倫理學の實踐的價値：八。余は此章を終るに先ちて尚一言倫理學の實踐的價値を論述せんとす。倫理學は啻に實踐を取り扱うのみならず又實踐に影響を及ぼすとの意義にて實踐的科學と稱することを得るや。曰くそは倫理學の本來の意義なりき。アリストテレース曰く。倫理學の目的は實踐にありて考察のみにあらずと。」[48)]

„8.Zum Schluß ein Wort über die Frage nach dem praktischen Wert der Ethik: kann sie eine praktische Wissenschaft in dem Sinne sein, daß sie nicht bloß von der Praxis handelt, sondern auch auf die Praxis Einfluß übt? Das war ihre ursprüngliche Meinung: in der Betätigung, nicht in der bloßen Betrachtung, sagt Aristoteles, habe die Ethik ihr Ziel“ [49)]

この節では、蟹江、蔡はそれぞれ「倫理學の實踐的價値」、「伦理学之所以为实践科学」という小見出しをつけた。蟹江と蔡の表現はやや異なるが、これらは原文を参照したとき特に不自然なものにはならない。

本文も蟹江、蔡共に忠実に原文から翻訳している。この節では、倫理学が実践を扱い、その実践に影響を与えるために、実践的価値を有することが説明されている。これは、アリストテレスの語を用いて裏付けられている。

ここでは、毛は「伦理学之正鹄在实践，非在讲求」[50)]（倫理学の目的は実践にあり、探究にはない）と記している。

以上のように、蟹江、蔡訳では、各節の初めに原文とは異なる各節の概要を表す小見出しがつけられていることを指摘した。このような翻訳の形式における共通点、また日本語訳、漢語訳に用いられている単語の共通性より、蔡が日本語訳を参照して翻訳していたことを推測することができた。

4　結論

中国が西洋文明を取り入れるようになったのは、アヘン戦争（1840－1842）による敗北を経験してからである。中国が開国を迫られたことによって合法的に外国の権力が中国政治に介入できるようになった。これによって中国は半植民地化することとなった。

これまで､中国では自らと異民族の対等性を認めないという中華思想が根強かった｡しかし、イギリスの侵略によって、中国を中心とした中華世界は崩れ落ちていった。

1862 年、富国強兵を目指す洋務運動が推進された。この運動は、西洋の産業、科学技術を導入することを目的としており、そのためには外国書を通じて西洋科学を学ぶ必要性があった。そして、同年には、1861 年に清国政府によって設置された総理各国事務護衙門によって、京師

同文館が翻訳のできる人材育成のために開設された。これによって中国の伝統的学問とは異なる「西学」という西洋学問が本格的に中国に入ってきた。

当初は英語、翌年には法文館・俄文館が設立されフランス語・ロシア語、1872 年にはドイツ語の徳文官、1896 年には日本語の東文館が増設された。

洋務運動では西洋思想を限定的に受け入れる中体西用論が基礎となったが、この認識は同じころに富国強兵を試みた日本に、日清戦争（1894－1895）で敗北したことによって改められざるをえなくなった。日本が中国にとって大きな役割を果たすようになったのは日清戦争以降で、中国はこれ以降、日本を手本として見直すようになった。

1896 年には清朝政府が日本に第一回目の官費留学生を送り、1905 年には一万人近い留学生が日本で学ぶようになった。日本では 1868 年の明治維新以来、30 年にわたって欧米の事物を表現するための文体と語彙を作り出してゆき、江戸時代にはなかった漢語を開発してきた。この新しい日本式漢語が、清国の留学生によって吸収され、西洋の事物を伝える道具として用いられるようになった。彼らの帰国後には中国全土に設立された新式教育の学校において、人々に広められることとなった [51)]。

蔡元培もまた、わずかな訪日体験を生かして、日本語訳の西洋文献を漢訳する力をつけた。

本稿の *System der Ethik* は 1900 年に蟹江によって日本語に翻訳された後、蔡によって漢訳され、中国が特に日本語の文献から西洋を吸収するようになった日清戦争以降の年代に合致する。

本稿では『倫理学原理』における蔡元培の翻訳の特徴をみてきた。蔡の翻訳をみると、原文に忠実に翻訳している蟹江とは異なり、蔡独自の表現を用いている箇所が目立った。例えば、„praktische Disziplinen“と„Künste“を区別せずに「術」とし、„rational“を「直覚」と翻訳した点などである。

また、近代以降に日本で造られた術語も蔡訳中に多くみられ、中国人が近代日本語を通して西洋を理解していたことが分かった。これは、蔡がこの時点でドイツ語の読解に苦戦したためというのも要因の一つであろう。蔡の日記中には「我在柏林一年，每日若干时习德语，若干时教国学，若干时为商务编写，若干时应酬同学，实苦应接不假。德语进步甚缓，若长此因循，一无所得而归国，岂不可惜！」[52)] とあり、ドイツ語の学習には苦労していた様子が表されている。

本稿の『倫理学原理』においては、蔡の翻訳には、蟹江の日本語訳の特徴が多く見られた。これは、蔡が原文のドイツ語と同様に、日本語訳を参照したためであり、漢語の『倫理学原理』の完成にあたって日本語訳が大きく貢献したことは明らかである。

＜注＞

1) Friedrich Paulsen, System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1, Berlin, 1896.
Friedrich Paulsen, System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 2, Berlin, 1896.
2) Shengda Guo, Die Rezeption des ethischen Werks von Friedrich Paulsen in China, Saarbrücken, 2010 pp.14-15
3)山下龍二　『儒教と日本』研文社、2001 年、p.48。
4)フリードリッヒ・パウルゼン著、蟹江義丸訳『倫理学』博文館、1900 年、例言 1 。
5) Friedlich Paulsen, Frank Thilly A System of Ethics, United States of America 1899 年、 序論 1-2
6)中共中央文献研究室中共湖南省委《毛泽东早期文稿》编辑组编『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』中国湖南人民出版社 2008 年。
7)中目威博　『北京大学元総長　蔡元培　夕刻の教育家の生涯』里文出版、1998 年、pp.75-76。
8)同上　p.17。
9)近藤邦康　『長沙時代の毛沢東　－哲学・運動・主義－』東京大学社会科学研究所編　『社会科学研究第 37 巻第 5 号』1986 年、 pp.17-18。
10)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p. 116。
11)上掲『倫理学』p.2。
12)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.1。
13)鈴木修次　『日本漢語と中国　漢字文化圏の近代化』中央公論社、1981 年、p.62。
14)孫常煒編『蔡元培先生全集』　臺灣商務印書館、p.108。
15)上掲　『日本漢語と中国　漢字文化圏の近代化』p.85。
16)汉语大词典编辑委员会 汉语大词典编纂处編『汉语大词典 第 8 卷』汉语大词典出版社 1990 年、p.57。
17)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.116。
18)上掲『倫理学』p.2。
19)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.1。
20)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.116。
21)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.116。
22)上掲『倫理学』p.2。
23)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 pp.1-2。
24)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p.117。
25)上掲『倫理学』pp. 2-3。
26)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.2。
27)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』p.117。
28)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.118。
29)上掲『倫理学』p.7。
30)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.6。
31)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.118。
32)汉语大词典编辑委员会 汉语大词典编纂处編『漢語大詞典　第 3 巻』汉语大词典出版社、1989 年、p.605。
33)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.118。
34)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 pp.123-124。
35)上掲『倫理学』p.16。
36)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.13。
37)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.124。
38)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.126。
39)上掲『倫理学』p.22。
40)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.17。
41)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.126。
42)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.128。
43)上掲『倫理学』p.25。
44)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.19。
45)汉语大词典编辑委员会 汉语大词典编纂处編『汉语大词典 第 6 卷』汉语大词典出版社、1990 年、p.1427。

46)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.128。
47)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.132。
48)上掲『倫理学』p.33。
49)上掲 System Der Ethik Mit EinemUmriss Der Staat-Und Gesellschaftslehre, Volume 1 p.25。
50)上掲『毛泽东早期文稿 1912・6‐1920・11』 p.132。
51)岡田英弘『大清帝国隆盛期の実像第四代康熙帝の手紙から　1661－1722』　藤原書店、2013 年、p.47。
52)中国蔡元培研究会編　『蔡元培全集　17』浙江教育出版社、1998 年、p.452。

主指導教員（桑原聡教授）、副指導教員（吉田治代准教授・高橋康浩准教授）